

【研究主題】PBIS（倉敷モデル）を活用した積極的学校経営の展開

【副題】ゆるやかなPBISと解決志向アプローチで好循環のサイクルを創出する

【学校・団体名】岡山県倉敷市立西中学校

【役職名・氏名】校長 松本 一郎

1 はじめに

本校は、全校生徒911名、32クラスの大規模校である。倉敷駅や大規模商業施設が学区にある倉敷市中心部の中学校である。旧岡山県倉敷実業学校の校舎として建築された築80年を超える木造校舎は、卒業生をはじめとする地域の人々の誇りとなっている。

2 現状と課題

本校は、今までも生徒指導における問題行動が学校経営上の課題であった。県警本部少年課学校警察連絡室の重点配置校であり、着任時には、5～6名の教室に入りにくい生徒がいた。また、問題行動をはじめ様々なストレスが、教職員の心身に悪影響を与えていた。これらの課題は、市内外を問わず、どの学校でも起きうる可能性がある課題である。

3 研究仮説

これまで学校は、問題に焦点を当て、問題を解決することで、いわゆる問題のない学校を目指してきたのではなかろうか。私は「悪いことがない学校がよい学校ではない。よいことがいっぱいある学校がよい学校である。」をテーマに、生徒のよい行動の増加こそ、課題解決の着眼点であると考えた。

この研究では、徹底してよい行動に焦点を当て、好循環を生み出し、よい行動を増やすことで、不適切な行動を未然に防止する考え方を基本とする。

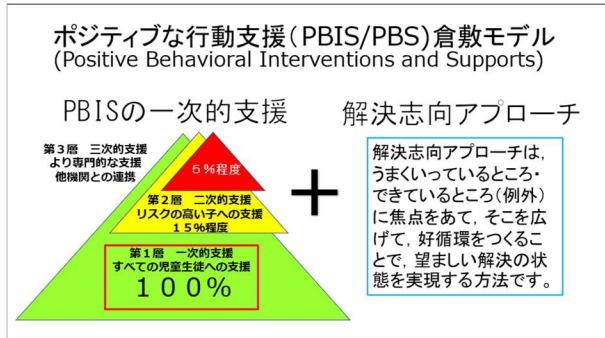
そのためには、問題対処的学校経営から、未然防止的学校経営へ、さらには積極的学校経営を推進する方向へ、校長自身が考え方を転換する必要がある。

4 研究の理論的背景及び研究計画と目標

(1) PBIS（倉敷モデル）の理論的背景

PBIS（倉敷モデル）とは、倉敷市教育委員会人権教育推進室が、いじめ未然防止を目的とし、平成30年に開発したプログラムである。（PBIS（倉敷モデル）は、以下、倉敷モデルとする。）

倉敷モデルとは、近年、岡山県でも実践が報告されているPBIS（ポジティブな行動支援）の一部（100%の生徒を対象とする一次的支援）に、



解決志向アプローチを組み合わせた。PBISは、応用行動分析を基礎理論とする包括的生徒指導の取組である。解決志向アプローチは、ブリーフセラピーに属するカウンセリング理論の一つである。近年は学級経営等、集団にも適用し、効果を挙げている。両方とも、できていることやよさを認める着眼点が共通しており、両者をグッドビヘイビアカード等（グッドビヘイビアカードは、以下、GBカードとする。）でつなぎ、好循環のサイクルを加速させることを、基本的な考え方とする。

(2) 自尊感情を高めるGBカードの活用理論

PBISの一次的支援には、本校では、GBカードを主に活用する。本校のGBカードは、一般的にPBISで活用されているGBカードとは異なった理論を適用し、成果を挙げている。

通常、PBISでは、行動チャート等でよい行動のモデルを示し、その行動を強化するために教員から生徒にGBカードを出すという手法をとる。



本校では、令和元年度6,000枚近いGBカードを教員が書いて、生徒によさを認めるモデルを示した。2年目から、生徒会を中心とした生徒主体の活動に移行した。ポジティブ心理学を提唱したマーティ

ン・セリグマンは、感謝の訪問の実験を行っている。そこでは、感謝の手紙を書いた人の幸福感が高まり持続するとしている。(セリグマン、2005)

本校のGBカードは、もらうことよりも、主体的に書いた生徒の自尊感情が高まり持続するというセリグマンのポジティブ心理学の理論に基づいている。積極的に周りの人々の無限にあるよいところを見つけ、感謝の言葉を添えてGBカードを書くことで、学校への適応感も高まると考えている。

### (3) 研究計画と目標

本校では、令和元年度から、スクールワイドで実践をスタートし、本年で4年目を迎える。

年度	年次目標と実践の概要
令和元年度	GBカードがある環境をつくり、教員がモデルとなり、徹底してよい行動に着目する教員の資質を育成する。
令和2年度	GBカードを書く主体を教員から生徒に移行し、生徒により行動に着目する資質を育成するとともに、教員は各教科・領域での活用実践を始める。
令和3年度	GBカードの活用バリエーションを増やし活用機会を多様に設けるとともに、授業に活用した成果をまとめる。
令和4年度	生徒主体の倉敷モデルの発展型を創造し、ICTの活用も含めた授業への倉敷モデルの応用を一層推進する。

## 5 実践の概要

### (1) GBカードのスタート

教員と生徒・保護者との良好な人間関係の構築を目標に、令和元年6月下旬の職員会議に提案し、7月からスタートした。5月、美術部の生徒約40人に原画を描いてもらい、6種類のGBカードを各1,000枚、合計6,000枚を印刷した。年度末には、全てのGBカードが、ほぼなくなった。教職員が約6,000枚のカードに、生徒の善行を書いて渡し、よさに注目するモデルを示した。

### (2) 生徒用GBカードの誕生

令和2年2月、GBカードについての振り返り生徒アンケートを実施した。その中で、「先生からもらうのもうれしいのですが、私たちも書きたいです。私たちのカードを作ってください。」という意見が多数あった。教員がモデルを示した成果の

現れと認識し、当初の計画通り、生徒主体のGBカードへ移行するため、生徒用として、春夏秋冬を



モチーフにした生徒デザインの4種のGBカードを、各1,000枚、合計4,000枚作成した。以後も増刷を重ね、3年間で2万枚を超える生徒用GBカードが活用された。単価は、1枚10円である。

### (3) 生徒会が主催する生徒主体のGBカード

2年目から生徒会が主催し、生徒主体の取組に変わった。各クラスで2名のグッドビヘイビア実行委員(以下、GB実行委員とする。)を募った。GB実行委員は、人気がある。生徒会執行部が、カードを入れるポストを設置し、見本のカードを掲示し、呼びかけを行った。木曜日をグッドビヘイビアの日とし、帰りの会を5分延長してカードを書いた。クラスのカードをGB実行委員が、集計室に持ち寄り、各学年学級に仕分け、仕分けられたカードを学級に持ち帰り、学級の生徒に配付する。もらった生徒は、返事を書くという好循環も見られ、活用するカードが増えていった。直近の令和4年6月~7月の取組では、生徒会の集計で約3,700枚のGBカードが、全校で交換された。

### (4) 学級活動で感謝の気持ちが連鎖

令和2年度から、学級でGBカードを生徒同士で書き合う学級活動に取り組んだクラスが多数



ある。50分で、約200枚~250枚のGBカードが書かれると担任から聞いた。生徒一人当たり7枚程度になろう。令和3年度末、卒業間際に実施したクラスでは、学級委員が担任に、「クラス全員分のカードをください。」と申し出たという。「私は、学級委員としてクラスみんなに、心から感謝をしている。一人ひとりにGBカードを書きたいの

でクラス人数分ください。」と申し出た。この言葉の背景にこそ、その生徒の自尊感情の高まりを担任は見たのである。GBカードは、もらってうれしいが、「自分が書くもの」という考え方で、先の学級委員のように自分の努力次第で、いくらでも書くことができる。先の学級委員の元へは、クラスメイトから多数のGBカードが、返礼として届いたとのことだった。GBカードは、感謝の連鎖を生むことで、生徒相互の自尊感情を高め合う。

#### (5) GBカードを活用した地域とのつながり

令和2年3月、新型コロナウイルス感染拡大を防止するため、学校が臨時休業となる直前、当時の第一学年の生徒たち約300名は、倉敷市内の七つの大病院の医療従事者の皆さんへ応援メッセージを贈った。模造紙にGBカードを貼り付けて作成した応援メッセージは、病院関係者の皆さんを勇気づけた。同時に、病院関係者からのお礼のメッセージが、学年の廊下に掲示された。生徒のGBカード作成活動

や病院関係者からの  
お礼の  
メッセ  
ージは、  
生徒の



社会貢献意識を高め、「コロナいじめ」を未然に防止する効果を発揮したと考えている。

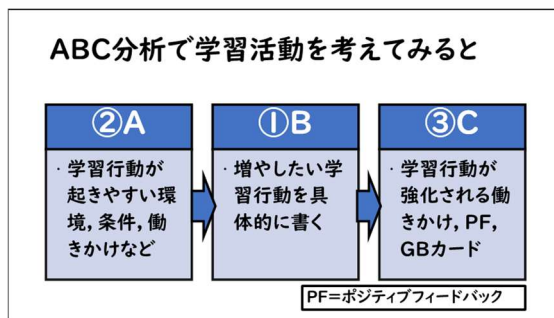
令和3年度は、倉敷市防災教育モデルプランを作成するため、先の学年が研究指定を受け、研究授業や防災現地研修を行った。防災学習のまとめの活動として、GBカードに真備町を応援するメッセージを書き、地域とつながるアイテムにもなっている。

#### (6) 倉敷モデルを学習指導に応用するメリット

令和2年度から倉敷モデルの考え方を学習指導に応用する実践を行ってきた。この考え方を学習指導に応用することで、新学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」を実現することができる考えたからである。

応用行動分析で活用されるABC分析（行動随伴性）の考え方をもとに、そのモデルを学習指導に応用する。そもそも、授業は、生徒の適切な行動の集積である。読む、聞く、書く、話す、まとめる、

話し合う、発表するなど、学習指導案の学習活動の述語は、全て、学習場面における適切な行動であることが分かる。



上図を参考に、まず、①Bは、授業で増やしたい適切な学習行動とする。次に、②Aは、適切な学習行動が行われやすい条件を示す。そして、③Cは、適切な学習行動が行われたときに、教員がどのようなフィードバックを行うかを示す。これを、ポジティブフィードバック(PF)と呼んでいる。これまでの学習指導案では、①Bと②Aについては、細かく書かれていたが、③Cについては、重点的に意識されてこなかったと考えている。

本校教員が、倉敷モデルを学習指導に応用した効果について、R3年度末研究収録から抜粋する。

- ・ 生徒の発言や記述に対して、今までより、より一層認める・ほめる・励ます回数が増えた。(③C) また、生徒の興味を引く導入を考えるようになった。(②A)
- ・ 活動を指示するときに、何を、どのようにすればよいのか、生徒に達成させたいことを意識して説明するようになった。また、生徒の頑張っていることを意図的に全体に伝えることが増えた。(③C)
- ・ 生徒のよさを見ようとする、生徒の理解度が分かる。間違っていて認識していることを発見し易くなるし、反対によく理解し、発展した考えをもっている生徒がいることも分かる。それにより自身の授業改善につながった。

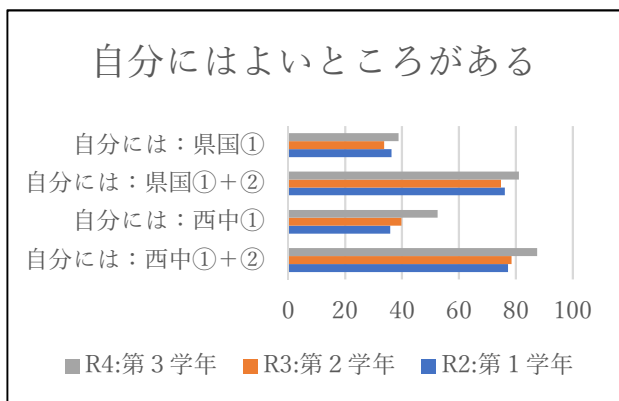
### 6 県と全国の学力・学習状況調査の結果から振り返る成果と課題

初め、倉敷モデルを考案したねらいは、いじめの未然防止であった。同モデルは、生徒の人間関係づくりへ、また、自尊感情の育成から、学力の向上まで、幅広い応用を可能とする。校長は、積極的學校経営の核心として位置付け、教職員とともに、一途に実践を続けている。

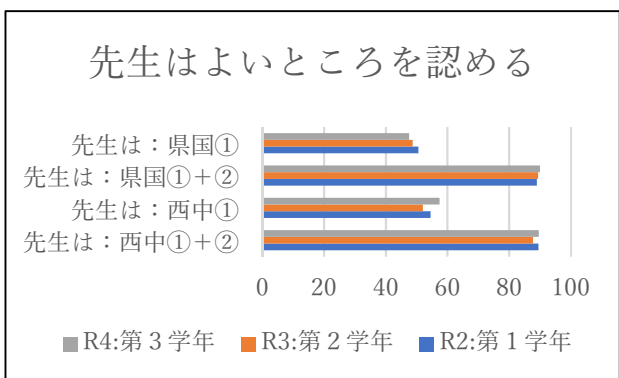
今年度の第3学年は、入学した令和2年度か



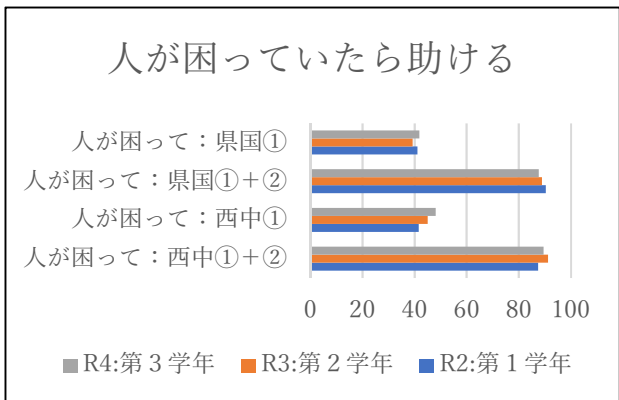
ら、倉敷モデルを理解した学年団教員によって、GBカードを中心とした本校の実践を中心となって推進してきた学年である。その学年の第1・2学年時の岡山県学力・学習状況調査と第3学年時の全国学力・学習状況調査の質問紙から時系列で比較し、分析する。①は、「当てはまる」、②は、「どちらかといえば、当てはまる」と回答した生徒の割合である。①+②は、肯定的回答の割合の合計である。



「自分にはよいところがある。」と肯定的に答えた生徒は、学年が上がるほど増加し、特に、①と答えた生徒が52.5% (国38.8%) と高くなっている。



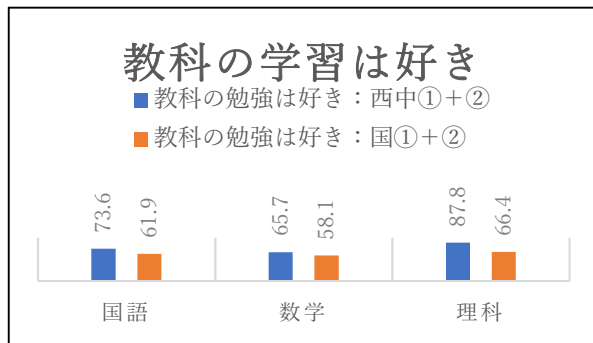
「先生はよいところを認めてくれる」と答えた生徒は、約90%で県国平均とほぼ同じだが、①と答えた3年生は、57.5%と国平均より9.9%高い。



「人が困っていたら助ける」については、善行の指

標にもなる項目である。①+②について、県国は、学年が進むと減少傾向にある。これは、いじめの傍観者が増えているという見方にもつながる。しかし、本校は、①と答えた生徒が全国平均より6%以上高い。(国41.9%) これは、いじめを止める・報告する可能性が高い生徒が比較的多いことを示している。

「教科の学習は好き」と肯定的(①+②)に答えた生徒は、全国の平均に比べて、数学は7.6%、国語は11.7%、理科は21.4%と、3教科とも高い。



本校は大規模校であるので、3年間3教科とも、3人の教員が学年を受け持っている。これほど高い結果を得るためには、全ての教員が、倉敷モデルの理解を深め、生徒のよさを認める方向性で授業を行い、PFで生徒の意欲を高めているからである。

令和4年2月の教員アンケートでは、「倉敷モデルは効果がある。」と、100%の教員が答えている。

現在、倉敷モデルは市内小中学校の約半数で実践されている。今後、この実践を学習指導に活用できる学校を増やすことが、倉敷モデルの効果を広め、定着させる課題になると考えている。

## 7 おわりに

令和4年7月、本校の教職員で一人3枚ずつ書き合い、GBカードの交換を行った。一学期の終業式の日、職員室が温かい笑顔に包まれ、同僚性の高まりを感じた。生徒のよさに着目し、よさを伸ばし、よい行動を増やすという方向性を、教職員が共感的に共通理解する。その中で、各学級・学年や校務分掌を担当する教職員により、多種多様な実践が生まれている。その主体性と多様性が、本校の最大の強みである。

最後に、校長が積極的に生徒や教職員のよさを認める姿勢で行動し、そのよさを日常会話や定期面談、GBカード等で伝え、教職員の共感を得つつ、好循環のサイクルを創出し続けることが、積極的経営を実現する核心であることを訴えたい。